地域社会における持続可能なエコミュージアムのあり方に関する一考察

―三鷹市「三鷹まるごと博物館」の取り組みを事例として―

法政大学大学院政策創造研究科修士課程　三鷹市市民ボランティア　**橋本　佳明**
三鷹市市民ボランティア　**生田　清敏**
三鷹市市民ボランティア　**中村　秀子**
三鷹市市民ボランティア　**並木　敏夫**
三鷹市市民ボランティア　**大槻　秀夫**
法政大学大学院政策創造研究科教授　**上山　肇**

要旨

日本におけるエコミュージアムは、1990年代から始まり、以降、全国各地で独自の取組みが行われてきた。本稿では、三鷹市「三鷹まるごと博物館」の実質10年間のあゆみを対象に、市民ボランティアの視線で、地域社会における持続可能なエコミュージアムのあり方を探るため、市民アンケート結果の検証、自治体担当部署へ聞き取り調査を実施した。その結果として、エコミュージアムのあり方には、市民ボランティア制度の整備、地域に根差した自主活動生涯学習団体のエコミュージアムへの参加や、行政の抱えるエコミュージアム事業の課題への市民による後押しなどが必要なことがわかった。また、市民ボランティアのモチベーションについて独自の考察を行った。

キーワード：エコミュージアム、市民参加、市民ボランティア活動、三鷹まるごと博物館、三鷹市

Considerations on Sustainable Ecomuseums in Local Communities A Case Study of the Mitaka Marugoto Museum

Hosei Graduate School of Regional Policy Design　Mitaka City Citizen Volunteer
Yoshiaki Hashimoto
Mitaka City Citizen Volunteer
Kiyotoshi Ikuta
Mitaka City Citizen Volunteer
Hideko Nakamura
Mitaka City Citizen Volunteer
Toshio Namiki
Mitaka City Citizen Volunteer
Hideo Ootuki
Hosei Graduate School of Regional Policy Design Prof.
Hajime Kamiyama

Abstract

Ecomuseums in Japan began in the 1990s, and since then, unique efforts have been made all over japan. In this report, we examine the 10-year history of the Mitaka Marugoto Museum in Mitaka City. In order to explore the ideal form of a sustainable eco-museum in the local community from the perspective of citizen volunteers, we verified the results of citizen questionnaires and conducted interviews with local government departments. As a result, the form of an ecomuseum requires the development of a citizen volunteer system, the participation of community-based independent lifelong learning organizations

in the ecomuseum, and the support of citizens to address issues faced by the government in the ecomuseum project.In addition, We made an original consideration about the motivation of citizen volunteers.

Keyword：Ecomuseum, citizen participation, Citizen volunteer activities, “Mitaka Marugoto Museum”, Mitaka-city

1 はじめに

1.1 研究の背景

2017年「文化芸術基本法」が成立し、これまでの文化芸術の振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業等関連分野における施策との連携や、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが盛り込まれるなど、従来の文化振興を越えた総合的な文化政策の展開が国の基本方針として位置づけられた。さらに、文化・教育（生涯学習）の分野においては、文化財保護法改正（2019年）に続き、博物館法改定（2024年4月施行）など、現在、文化・教育（生涯学習）分野の行政が大きく変わろうとしている状況にある。

文部科学省「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」(1993年）で、エコミュージアムとは、ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館とした。これに先立ち1980年、ICOM（国際博物館会議）では、エコミュージアムを、「行政と住民が一緒に構想し運営していくもので、行政は専門家と施設や資金を、住民は知識と能力を提供しあって作り上げていくもの」と定義している。

日本では、1990年頃以降の山形県朝日町のエコミュージアムが第1号とされているが、現在、全国の自治体においてもエコミュージアムの取り組みが進められている。

1.2 先行研究

エコミュージアムは、建物施設に展示する従来の博物館に対し、地域全体を博物館とするものであるが、エコミュージアムの概念、構成要素や、住民の関わり方、地域振興に関する研究は数多くなされている。

田中（1999）は、エコミュージアムの構成要素を、コアミュージアム（中核施設・博物館）、サテライトミュージアム（衛星博物館）、およびディスカバリートレイル（発見の小径）とした。笹谷ら（1995）は、コア、サテライト、ディスカバリートレイルの構成要素を指摘したうえで、エコミュージアムをつくる主体は住民と行政であり、住民の一人ひとりが学芸員になることが理想と言及している。

大原（2003）は、エコミュージアムは、地域全体を生きた博物館として育てていくエコロジカルな活動で、自然、文化遺産現地保存と、住民自身の参加による管理運営活動と、博物館活動の3要素がバランス良く整い、かつ一体的に密接なネットワークを組むことが理想的な姿とした。

田村ら（2011）は、日本初のエコミュージアムである山形県朝日町をとりあげ、エコミュージアムと住民の関係性について、地域住民は自らの自然環境や文化遺産などの地域資源を活用して、生活の質を高め、地域社会を維持発展させる活動が定着していると指摘している。

福留（2012）は、住民は利用者であり、参加者であり、博物館職員であり、エコミュージアム構想を結実させるには、関係者の学習、行政の理解、担当者の熱意、住民の協力が不可欠と述べている。

このようにエコミュージアムにおける住民のあり方に関する研究は多くあるものの、住民と行政の関係性に焦点をあてた研究は少ない。そこで我々は、住民の観点から、住民参加に着目し、三鷹市を事例に検証するものである。

1.3 研究の目的

本稿では、エコミュージアムの実態について探るとともに、特に東京都三鷹市の三鷹型エコミュージアム構想「三鷹まるごと博物館」の10年の歩みにおける住民ボランティアの取り組みについて検証しながら、地域社会における持続可能なエコミュージアムのあり方について、住民ボランティアに焦点を当て探ることを目的としている。

2 日本におけるエコミュージアム

国内のエコミュージアムは、エコミュージアムの定義である地域の自然環境、文化、歴史、人々の暮らしの要

素を包含する野外博物館としてのエコミュージアムと、主に自然に特化し、自然環境を保存するとともに自然を楽しむ目的の自然公園型エコミュージアムとに選別される。

表 1　全国のエコミュージアム　（筆者調べにて作成）

所在地	名称	博物館	自然
北海道	塘路湖エコミュージアム		●
北海道	川湯エコミュージアム		●
北海道	中川町エコミュージアム	●	
北海道	洞爺湖周辺地域エコミュージアム構想	●	
北海道	はまなかエコミュージアム構想	●	
北海道	北広島エコミュージアム	●	
北海道	阿寒湖畔エコミュージアム		●
青森県	十二湖エコミュージアム		●
岩手県	イーハトーブエコミュージアム	●	
岩手県	北上川エコミュージアム	●	
岩手県	いわてデジタルエコミュージアム	●	
山形県	朝日町エコミュージアム	●	
宮城県	エコミュージアム涌谷	●	
福島県	三島町エコミュージアム	●	
新潟県	新潟県立浅草山麓エコミュージアム		●
茨城県	常陸太田エコミュージアム	●	
栃木県	エコミュージアムあしおの創造	●	
栃木県	鹿沼まるごと博物館	●	
栃木県	渡良瀬遊水地×協働		●
埼玉県	滑川町エコミュージアム	●	
埼玉県	志木まるごと博物館 河童のつづら	●	
埼玉県	狭山丘陵エコミュージアム構想	●	
埼玉県	秩父まるごと博物館	●	
千葉県	東いちはらエコミュージアム	●	
千葉県	富浦エコミューゼ	●	
千葉県	館山まるごと博物館	●	
千葉県	千葉市エコミュージアム構想	●	
東京都	三鷹まるごと博物館	●	
東京都	エイト・ブルー構想	●	
神奈川県	多摩川エコミュージアムプラン	●	
神奈川県	金目エコミュージアム	●	
神奈川県	城山エコミュージアム	●	
長野県	軽井沢町塩沢村エコミュージアム	●	
長野県	阿智村全村博物館構想	●	
長野県	エコミュージアムながわ	●	
長野県	松本まるごと博物館	●	
長野県	須坂まるごと博物館	●	
山梨県	エコミュージアム日本村	●	
山梨県	山中湖エコミュージアム	●	
山梨県	河口湖フィールドミュージアム	●	
岐阜県	エコミュージアム関ケ原	●	
三重県	宮川流域エコミュージアム		●
三重県	伊勢まるごと博物館	●	
滋賀県	湖国まるごとエコミュージアム	●	
滋賀県	米原エコミュージアムプログラム	●	
滋賀県	速野まるごと博物館	●	
富山県	立博まるごと博物館	●	
石川県	手取川エコミュージアム構想		●
福井県	越前市エコビレッジ交流センター		●
福井県	勝山市エコミュージアム	●	
京都府	JOYOエコミュージアム	●	
京都府	森の京都「なんたん」エコミュージアム	●	
大阪府	平野・町ぐるみ博物館	●	
大阪府	ちはや星と自然のミュージアム		●
兵庫県	上山高原エコミュージアム		●
兵庫県	コウノトリ文化館		●
兵庫県	北はりまエコミュージアム	●	
奈良県	天川村洞川エコミュージアム		●
和歌山県	くじらと海のエコミュージアム太地	●	
島根県	瑞穂ハンザケ自然館		●
島根県	鉄の歴史村	●	
岡山県	草間台エコミュージアム		●
岡山県	津山・城西まるごと博物館	●	
広島県	エコミュージアム川根		●
広島県	三次まるごと博物館	●	
山口県	秋吉台エコ・ミュージアム		●
徳島県	美郷ほたる館		●
徳島県	あさんライブミュージアム	●	
愛媛県	今治市宮窪町エコミュージアム構想	●	
高知県	きたひろエコ・ミュージアム	●	
福岡県	京築エコミュージアム	●	
福岡県	平尾台自然観察センター		●
大分県	竹田エコミュージアム構想	●	
熊本県	阿蘇たにびと博物館		●
宮崎県	えびのエコミュージアム	●	
鹿児島県	桜島まるごと博物館構想	●	
鹿児島県	屋久島オープン・フィールド博物館		●
沖縄県	南城市エコミュージアム	●	

これらを外見的に考察すると、自治体主導ではなく民間主導の形態、主に自然環境保護に特化するもの、観光振興を目的とするもの、道の駅をコア施設としているなど、必ずしもコア（中核施設・博物館）、サテライト（衛星博物館）、ディスカバリートレイル（発見の小径）が設置されているわけではなく、多種多様なエコミュージアムが存在することが確認された。また、同様に住民との関係性についても濃淡があるであろうことが伺い知れた。

3 三鷹まるごと博物館

3.1　三鷹市

三鷹市は、東京 23 区と多摩地域との境界にあり、市域の大半は武蔵野台地上に位置する（図 1）。北東には、井の頭恩賜公園と井の頭池があり、神田川は井の頭池を源

流とする。南西の大沢地区には、国立天文台があり、野川が流れ、国分寺崖線という河岸段丘が存在する（図2)。このような立地から、三鷹市は「緑と水の公園都市」をキャッチフレーズとしている。

図１　東京都三鷹市地図

（出所：三鷹市 HP）

図２　三鷹市地図

（出所：mapbinder）

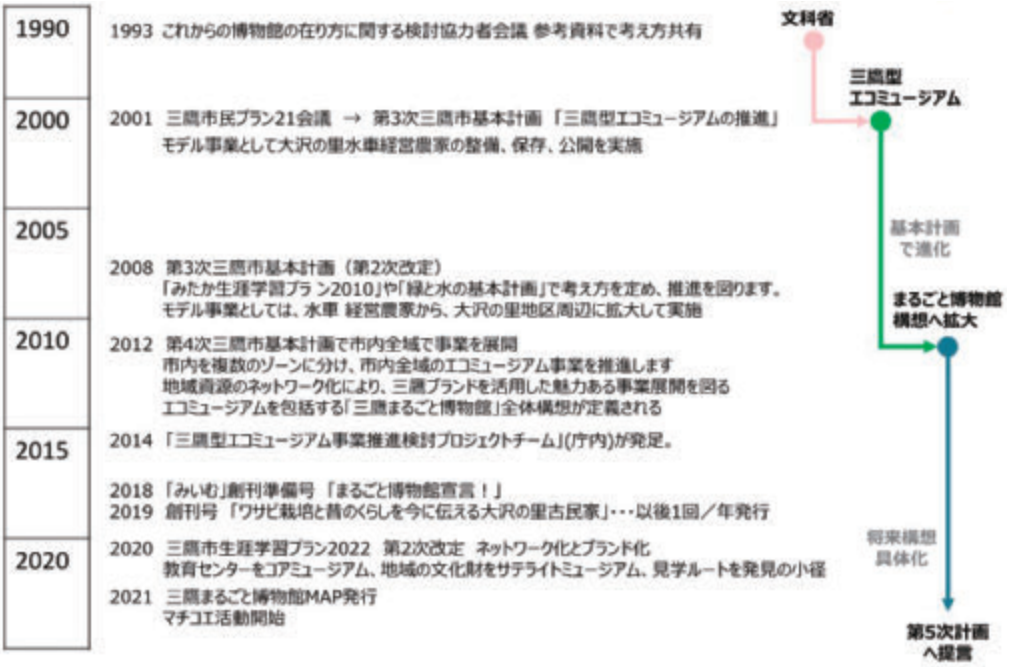
3.2　三鷹型エコミュージアム構想

三鷹市は、地域博物館・郷土博物館などの施設を有しない東京都内において極めて稀有な自治体（三鷹市と狛江市のみ）である。

三鷹市の三鷹型エコミュージアム構想は、一人の職員の、「これからは、大きな郷土資料館のような箱モノではなく、現地でそのまま展示・保存する時代です。それをエコミュージアムといいます。ヨーロッパでは主流の考え方です」との予算査定の場での発言から、議論の末、安田養次郎市長（当時）が「面白い」と受け止め、2001年第３次基本計画に採用され、2012年第４次基本計画にて、市内を複数のゾーンに分け、地域資源のネットワーク化による魅力ある三鷹型エコミュージアム構想として宣言した。

2013年、この三鷹型エコミュージアム構想は、三鷹市を屋根のない博物館に見立てた「三鷹まるごと博物館」として、まず大沢の里の事業を運営開始した。大沢の里では、大沢の里水車経営農家や、わさび栽培と季節とともにあった昔のくらし伝える大沢の里古民家を市民参加による現地保存、一般公開の取り組みをスタートさせた。

表 2　三鷹市エコミュージアム構想取組経緯



（筆者作成）

事業開始にあたり、三鷹市文化財保護審議会、馬場憲一会長（法政大学名誉教授）は、「三鷹型エコミュージアムは、生涯学習機関であり、その活動が、新しい地域社会の人づくりやまちづくりにつながることに期待している。」(みいむ創刊準備号）と述べている。

3.3　三鷹まるごと博物館の考え方

三鷹まるごと博物館は、三鷹市内の街並みを屋根のない「まるごと」博物館に見立てる取り組みであり、文化5年（1808）創設・大沢の里水車経営農家の、市民参加による現地保存の取り組みが、三鷹市基本計画に組み込まれ、全市的な展開として進められているものである。

古い農家や蔵、街角に残された小さな石仏、また見慣れたいつもの街並みも、それらがそこにあった「エピソード」があるはずであり、また、文化財を建物の中に押し込めるのではなく、できれば本来あった場所で、地域の人によって守られているそのままの姿を観察し、さらにまだ文化財になっているわけでもないエコミュージアムの原石を、市民の手で探すこと。そして、三鷹という地域が、なぜどのように移り変わり、今の姿になっていったのかという地域固有の歴史を考え、子どもたちに伝えることで、未来のまちづくりにも役立てようとするのが、「三鷹まるごと博物館」の考え方である。

現在は、「しんぐるま（水車)」を展示する大沢の里水車経営農家のある大沢の里で、明治時代のわさび農家である「大沢の里古民家」の公開を行う一方、地域固有の歴史を市民とともに「ふかぼり」する活動を進めており、この活動は、三鷹まるごと博物館ホームページをはじめ、年1回発行の「三鷹エコミュージアム研究『みぃむ』」や、SNS（X、Instagram）などで公開している。

3.4　三鷹まるごと博物館関連事業

「みぃむ創刊準備号」が発行された2017年以降の三鷹まるごと博物館関連事業を表3にまとめた。

主に講座、体験学習、イベント行事、展示などが行われ、年々、事業が拡大してきている。とりわけ、2021年度からは、大沢の里古民家での市民ボランティアによる「わさび田保全の取組み」や「紫草育成取組み」が活発化してきていることがわかる。

図 3　三鷹まるごと博物館 MAP

（出所：三鷹まるごと博物館 HP）

図 4　三鷹エコミュージアム研究「みぃむ」

（出所：三鷹市 HP）

表 3　三鷹まるごと博物館関連事業

三鷹まるごと博物館関連事業の推移	
2017年度	
講座	エコミュージアム入門講座（日本茶の魅力を知ろう）
	三鷹の魅力を発信しよう!レポーター養成講座「三鷹型エコミュージアムで活躍しませんか」
	文化財市民協力員養成講座（三鷹の民謡研究）
	井の頭100祭関連事業（ふかぼり井の頭）
	歴史・文化財連続講座（学芸員と学ぶ古民家の魅力）
	発掘体験ワークショップ
	文化財講演会（大政奉還から150年 三鷹吉野家文書から）
	考古学講演会（北野村と庚申塔の歴史を探る-武蔵野新田開発-）
展示	大沢の里水車経営農家－おカイコさんと昔のくらし
	大沢の里水車経営農家－精米・製粉作業見学会
	大沢二丁目古民家（仮称）整備工事見学会
	井の頭と江戸
	発掘体験ワークショップ展示会
	北野村と庚申塔の歴史を探る
常設	大沢の里水車経営農家
	出山横穴墓群第8号墓
	三鷹市スポーツと文化部生涯学習課分室（埋蔵文化財収蔵庫）
2018年度	
講座	歴史・文化財連続講座（三鷹大沢わさびのDNAをたどる）
	エコミュージアム交流会「三鷹まるごと博物館の活動に参加しませんか」
	エコミュージアム入門講座（蚕のいる暮らし）
	文化財市民協力員養成講座（大沢の里古民家建築を探る）
	考古学体験講座1（縄文人が食べていたもの）
	文化財講演会（逝きし世の面影を集めて-明治の人たちと三鷹）
	考古学講演会（三鷹の縄文）
	考古学体験講座2（縄文パズル）
展示	火の見櫓と三鷹の消防の歴史展
	大沢の里水車経営農家精米・製粉作業室見学会
	三鷹の縄文さわれる展示
	まもなくオープン大沢の里古民家直前展示会
常設	大沢の里水車経営農家
	出山横穴墓群第8号墓
2019年度	
講座	エコミュージアム交流会「三鷹まるごと博物館の活動に参加しませんか」
	エコミュージアム入門講座（蚕の歴史と魅力-触れる育てる体験）
	文化財講演会（自家製茶の奥深い世界）
	歴史・文化財連続講座（三鷹まるごと博物館を歩く-縄文～令和）
	考古学体験講座1（縄文パズル）
	考古学講演会（モノをもたない暮らし-旧石器人のライフスタイル）
	考古学体験講座2（ドッキーをつくろう!!）
	文化財市民協力員養成講座（英語で伝える三鷹の歴史）
行事	大沢の里水車・古民家まつり
	大沢の里水車経営農家精米・製粉作業室見学会
	大沢の里古民家ブックカフェ
	モノをもたない暮らし-旧石器人のライフスタイル
常設	大沢の里水車経営農家
	大沢の里古民家
	出山横穴墓群第8号墓
2020年度	
クラウドファンディング大沢の里水車経営農家水輪再生プロジェクト	
講座	大沢の里古民家講座（多摩と三鷹の方言を学ぶ）
	エコミュージアム交流会（三鷹まるごと博物館の地図を作ろう）
	考古学体験講座1（縄文人が食べていたもの）
	考古学体験講座2（石器づくり教室）
	考古学講演会（考古学とゲノム分析からみた三鷹の古墳時代）
	文化財講演会（なぜ村名を三鷹と名付けたか）
行事	大沢の里古民家イベント Jazz in 古民家
	大沢の里水車・古民家まつり
	人骨から読み解く三鷹の古墳時代展
	マイフェイバリット縄文土器展
	大沢の里古民家企画展（古民家と妖怪）
常設	大沢の里水車経営農家
	大沢の里古民家
	出山横穴墓群第8号墓 保存・公開施設
	みたかえる（三鷹歴史文化財展示室）
2021年度	
講座	大沢の里古民家講座（家は内!～異界とつながる古民家展～）
	考古学体験講座（人間は石器をどのように使ってきたか）
	考古学体験講座（三鷹の縄文人どんな人?）
	考古学講演会（戦国時代前期の城と集落－深大寺城と島屋敷を中心に）
	文化財講演会（高度成長期と三鷹の暮らし）
	三鷹歴史談話「みんなで学ぶ三鷹の歴史」講座 三鷹村のはじまり
	暮らしの道具の知恵と技～形の謎を知ろう～三鷹ネットワーク大学共催
	大沢の里古民家講座（幕末の大沢を訪ねる～近藤勇 故郷への手紙から）
	子どもたちが描いた大沢の里展

行事	三鷹まるごと博物館バックヤードツアー
	ふかぼりウォーク上連雀
	大沢の里水車・古民家まつり
取組	大沢の里古民家「わさび保全の取組み」
	大沢の里古民家「紫草育成の取組み」
	大沢の里古民家「フジバカマ育成の取組み」
常設	大沢の里水車経営農家
	大沢の里古民家
	出山横穴墓群第8号墓 保存・公開施設
	みたかえる（三鷹歴史文化財展示室）
2022年度	
講座	三鷹まるごと博物館講演会（大山詣りと上連雀井口院の巨大木太刀）
	三鷹まるごと博物館講演会（新年の願いを結ぶしめ飾り）
	大沢の里古民家講座（どぶろく～日本の酒文化～）
	大沢の里古民家講座（三鷹で茶摘み）
	大沢の里古民家講座（万葉の香りを楽しむ フジバカマ）
	大沢の里古民家講座（小正月のまゆ玉飾り作り）
	考古学体験講座（縄文人になる!）
	考古学体験講座（To Make マイ土偶）
	文化財講演会（消えゆく方言～三鷹弁・多摩弁～）
	暮らしの道具の知恵と技～民具の形の謎を探る 三鷹ネットワーク大学共催
展示	考古学展示会（三鷹12万年史～海と陸の変遷とヒトの暮らし）
	大沢の里古民家企画展「五感で楽しむ夏の涼」
行事	『わさびサミット2022』食文化わさび食保存の取組み報告会
	ふかぼりウォーク牟礼
	文化財見学会（石造馬頭観音供養塔文化財見学会）
	大沢の里水車・古民家まつり
取組	大沢の里古民家「わさび保全の取組み」
	大沢の里古民家「紫草育成の取組み」
	大沢の里古民家「季節の草花ボランティア活動開始」
常設	大沢の里水車経営農家
	大沢の里古民家
	出山横穴墓群第8号墓 保存・公開施設
	みたかえる（三鷹歴史文化財展示室）

（筆者作成 出所：みいむ）

3.5　三鷹まるごと博物館を支える市民

前述のように、三鷹まるごと博物館は2001年の第3次三鷹市基本計画に、「三鷹型エコミュージアムの推進」がうたわれたところから始まる。

その背景には「水車クラブ」(1989年発足）の存在があったことは想像に難くない。水車クラブは、一人の市民が市内散策中に、水車を動力源とした大規模な精米、製粉装置が残されていることを発見し、これを保存、活用していこうと集まった市民グループである。この水車装置こそ現在三鷹まるごと博物館の常設展示施設となっている「大沢の里水車経営農家」である。会の発起人、宮川氏は、「その間、市に対してさまざまな政策提案を行った。」(第1回三鷹型エコミュージアム交流会）と述べている。

2002年からは、三鷹市による「水車ボランティア養成のための専門講座」が不定期に開催され、「市民解説員」として、来場者に水車装置の魅力を伝えている。市民解説員の登録は2023年8月現在約35名である。

ボランティア活動が拡大したのは、2017年に「大沢の里古民家」の復元工事が始まってからである。この工事に合わせて、三鷹市は2017年7月5日から5回シリーズの講座「三鷹の魅力を発信しよう！！レポーター養成講座～三鷹型エコミュージアムで活躍しませんか～」を開催し11名が受講した。受講生の内5名が市民レポーターグループ「チームわさび」を結成した。チームは、講座終了後も継続して復元工事の取材に取り組み、報告書を作成して三鷹市に提出した。また、「チームわさびの　大沢の里古民家　おすすめ！見どころ10選」という市民目線で古民家を解説したパンフレットを作成した。さらに、「みいむ」創刊準備号と創刊特集号には、復元工事の様子を市民に伝える記事を寄稿した。

2018年10月25日には「三鷹市大沢の里郷土文化施設体験学習市民ボランティア説明会」が開催され、本格的にボランティアの募集が始まった。その後、イベントのたびにボランティアへの登録を呼びかけたり、口コミで広まったりして、2023年8月時点の登録者数は、約95名に達している。

発足当初、ボランティアメンバーの活動内容は、①ワサビ田復活プロジェクト、②養蚕体験ワークショップ、③しめ縄作り体験ワークショップ程度であったが、2023年度までに次のような活動が追加されている。④紫草の栽培と紫根染め体験、⑤大沢の里四季の草花解説ガイド、

写真1 大沢の里古民家

写真2 大沢の里わさび田

写真3 紫草の種まき

写真4　四季の草花講座

（写真1～4 筆者ら撮影）

⑥大沢の里水車古民家まつりガイド、⑦竹灯りの製作・展示、⑧ナイトミュージアムイベントガイド、⑨その他、適宜行われるワークショップやイベント多数。この中には、④⑤のように、市民の発案で始まったものもある。

このように、三鷹まるごと博物館の取り組みは年々充実しており、それを支えるボランティアの人数も増えている。

3.6　三鷹まるごと博物館の今後の方向性

三鷹市文化財保護審議会は、2022年6月に三鷹市長に審議会委員提案書「三鷹市まるごと博物館～三鷹型エコミュージアム事業の今後の進め方～」を提出した。意見書では、①文化的遺産（史資料）の保存と活用、地域の学びの拠点、まちづくり人づくりの場、②館則の条例化、③将来的な公文書館機能の付与、④コア博物館施設の建設、⑤専門職員、学芸員、館長の選任と博物館協議会の設置、⑥市民参加を旨とし市民や市民で構成する団体との連携・協力のもとの運営体制など、制度化と文化財の活用を促す提言がなされた。

さらに、2023年4月三鷹市文化財保護審議会定例会にて、三鷹市スポーツと文化部生涯学習課より「三鷹まるごと博物館の企画段階からの市民参加について、三鷹まるごと博物館事業のあり方検討助言者会議を立ち上げ検討していく。市民による自主活動グループとは引き続き連携を続け、多くの市民に推進される支援を行う。また、今年度より、ICU（国際基督教大学）のサービス・ラーニング授業（社会貢献ボランティア活動）にて、大沢の里わさび田プロジェクトへ大学生を受け入れる」との言及があり、既に2023年4月から大学生ボランティアとの協働が開始されている。また、今年度より市内小学校学童、中学校ボランティア部の生徒もボランティア活動に参加する試みが行われている。

また、三鷹市第5次基本計画策定に対し「三鷹市市民参加でまちづくり協議会・心ゆたかなまちづくり部会・文化歴史グループ」が、20年後のあるべき姿を見据え、文化財を守る市民協働のあり方や、文化財活用面での観光・商工業分野と連携、地域教育への展開など、三鷹まるごと博物館構想を活かした市民が主役となる市民協働によるまちづくりを政策提案にとりまとめ、2023年7月、三鷹市長へ提出した。

4　三鷹まるごと博物館に対する調査

4.1　調査方法

三鷹まるごと博物館の現状調査として、三鷹市の文化歴史事業および三鷹まるごと博物館の認知度や市民のかかわり方についての三鷹市民対象のアンケート結果を検証した。なお、当該市民アンケートについては、筆者らが参加した三鷹市市民参加でまちづくり協議会、心ゆたかなまちづくり部会、文化・歴史グループとして、2022年10月18日～2023年2月14日に実施した三鷹市民へのweb方式アンケート結果を引用する。また、三鷹市スポーツと文化部生涯学習課担当者に対し、三鷹まるごと博物館の創設の経緯から現在までのあゆみと、課題、今後の取組み、市民ボランティア活動状況について、2023年8月22日に訪問のうえ聞き取り調査を実施した。

4.2　市民アンケート調査

「三鷹市市民参加でまちづくり協議会」文化・歴史グループが実施した三鷹市民アンケート結果によると、約75％の市民が三鷹市の文化歴史事業に少なからず関心があると回答している。

一方で、三鷹まるごと博物館をよく知っていると回答は、12.2％の市民に留まっている状況であり、三鷹まるごと博物館事業の認知度はまだまだ低いものと判断する。しかしながら、三鷹まるごと博物館へのかかわり方として、イベントや講座などの運営に関わりたいが9.9％あり、イベントや講座などに参加したいは44.3％であった。

Q1 三鷹市の文化歴史事業に関心や興味がありますか

（いずれかを選択　回答数131）

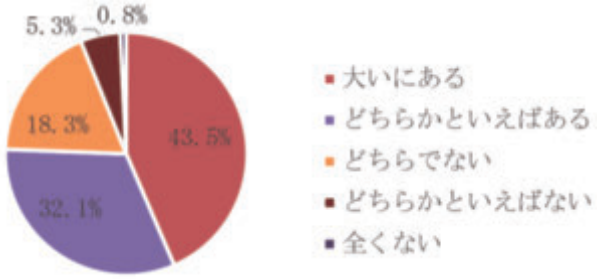


図5　市民webアンケート結果（Q1）

（筆者作成　出所：三鷹市市民参加でまちづくり協議会HP）

Q2「三鷹まるごと博物館」をご存じですか

（いずれかを選択　回答数131）

図6　市民webアンケート結果（Q2）

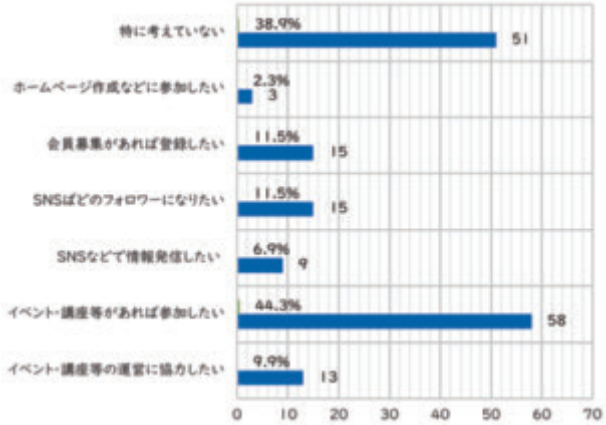
（筆者作成　出所：三鷹市市民参加でまちづくり協議会HP）

表 4　市民 web アンケート結果（Q3）

（筆者作成　出所：三鷹市市民参加でまちづくり協議会HP）

Q3「三鷹まるごと博物館」にどのように関わりたいですか

（複数選択あり　回答数 131）



4.3　三鷹市スポーツと文化部生涯学習課ヒアリング

2023 年 8 月 22 日に三鷹市役所を訪問し、三鷹市スポーツと文化部生涯学習課、三鷹まるごと博物館担当者（学芸員）に、半構造化インタビューを行った。

(1) 三鷹まるごと博物館の創生

安田市長時代、市民が保存活動をしていた水車の公開にあたって、市民主導の水車の取組みがエコミュージアム取組みの代表例ということで、一人の職員が発案し、基本計画の郷土資料博物館建築が、三鷹型エコミュージアム構想に置き換わったことに由来する。当時は水車以外を想定していたとは言い難いが、大沢の里古民家の取組みを始めたときに、三鷹型エコミュージアム構想を全市展開しようと名称を「三鷹まるごと博物館（三鷹型エコミュージアム）」と変更した。

(2) 三鷹まるごと博物館事業の概要

三鷹まるごと博物館は大きな枠組みであり、まず公開活動としては、「大沢の里水車経営農家」、「大沢の里古民家」、「みたかえる（三鷹歴史文化財展示室）」を主要拠点として、「出山横穴墓群 8 号墓」などを公開している。

大沢の里、とりわけ古民家では、体験学習、講座、イベントの 3 つの事業を大切にしている。三鷹の歴史や古民家の昔の暮らしにちなむ、地域に根差した事業にこだわりをもって展開している。

また、並行して、三鷹の未だクローズアップされていない歴史的資源の深堀を行うことを実施している。市民参加のまち歩きで探りを入れ、「みぃむ」で発表し、さらに調査研究をしていく。三鷹には稀にみる歴史的資源（古文書など）が豊富に存在する。この部分は、地味な取組みであるが、博物館の本来機能であり大切にしていきたい。

(3) 市民ボランティア、市民参加について

現在、「大沢の里郷土文化施設ボランティア」制度を設けているが、少し硬い制度のため活動実態との乖離が発生している。近く、制度改定し「三鷹まるごと博物館ボランティア」として規約を実態に合わせシンプルにしたい。水車関連は手を付けず、わさびグループ、古民家（建築）グループ、養蚕グループを想定している。新たな枠組みの中で、自分のできる範囲で、自分ができる関心のある活動に参加すればよい仕組みにする。期間（1 年か 2 年）を定めて継続意思確認をしていくようにしたい。

ボランティア以外にも、市内の生涯学習団体の中には、地域に根差した活動をしている市民団体が数多く存在する。また、歴史研究する団体に三鷹にちなんだ材料を提供し地域を意識してもらうこともできる。地域に根差した活動は、すべて三鷹まるごと博物館事業の活動になることを啓蒙したい。そのために、過去実施した活動団体間の交流会を再開することを検討している。将来的には、三鷹まるごと博物館に、市民の地域に根差した生涯学習団体のハブ機能を持たせることが理想である。

(4) 三鷹まるごと博物館の課題

まず、一番の課題は、市庁内での当該事業の位置づけが不明確であること。市の基本計画、生涯学習課の生涯学習プラン、公園課の個別計画には簡単に触れられているものの、三鷹まるごと博物館自体の個別計画が現状存在しない。個別計画がない状態では戦略的で継続的な事業展開が図れているとはいえず懸念材料である。文化財保護審議会からは条例化を進言されているが、個別計画化も条例化もボトムアップでは難しいのが実情である。

歴史資料館的な公開展示・収納設備の整った施設がないことも大きな課題と考える。市内にまだまだ沢山の歴史的な資源がうずもれたままであり、破棄される可能性も危惧される。また、施設がコミュニケーションの場になり、さまざまな活動団体や市民の情報交流が期待される。

三鷹まるごと博物館のイベント事にことさら注目が集まるが、博物館の根幹である地域の歴史や文化を調査研究して継承していくことが第一義であり、目に見える効果だけを評価されて事業化していくことにジレンマを感じる。

4.4　調査結果

三鷹まるごと博物館事業に対する市民認知度は12%と低い一方、文化歴史事業への関心度は75%と高く、潜在的なニーズや市民参加への可能性を計り知れた。また10%弱の市民がイベント・講習等の運営にかかわりたいとの意向があることがわかった。

三鷹市生涯学習課ヒアリングから、市民ボランティア活動の経緯や実態、今後の展望、ならびに市民参加の広がりのために市民活動団体へのアプローチを模索していることがわかった。さらに、三鷹まるごと博物館の市庁内での事業の位置づけ、施設体制面での課題、エコミュージアム事業の抱えるジレンマなどが明らかとなった。

5　三鷹まるごと博物館における市民ボランティア活動の持続可能性への課題に関する考察

5.1　市民ボランティアのモチベーション要件

筆者らは、自らのボランティア活動体験を通じて、地域社会におけるエコミュージアムの持続可能な住民ボランティア活動の必要要件として、①知的な満足感を得られること、②人対人によるコミュニケーションの刺激があること、③適切なインセンティブがあることと考えている。

3つの要件について、筆者らの参加する三鷹まるごと博物館、ワサビ田復活プロジェクトを例に現状を述べる。

5.2　知的な満足感を得られること

ボランティア発足当初は、養成講座を受けることが参加の条件となっていたが、ここ数年は、申し込めば誰でも参加できるようになっている。これでは、知的な満足を得られないのではないかと思われる。また、このプロジェクトのボランティア活動は、市が計画した通りに作業することが中心になっている。そのため、湧水の減少や温暖化によって栽培環境が厳しくなっている中で、いかにして三鷹大沢わさびのワサビ田を復活させるのか、そういう課題をボランティアと一緒に学んだり、ボランティア同士の研究成果を発表し合うなど、新たな知識に触れる取り組みが必要ではないかと思われる。

5.3　人対人によるコミュニケーションの刺激

現状は、活動日に集合し作業、作業が終われば解散、といったパターンであり、ボランティアメンバー間のコミュニケーションを促進しようという配慮が不足していると感じている。作業だけではなく、課題について話し合ったり学習したりする機会を作れば、コミュニケーションの刺激と共に、知的な満足にもつながると考える。

5.4　適切なインセンティブ

現在のインセンティブは、大沢の里古民家及び水車経営農家への入館料（200円）の免除であるが、活動実績に関わらず免除される。そのため「公平性に欠ける」といった声がある。三鷹市では、2022年12月1日から「みたか地域ポイント」を試行しており、一部のボランティア活動やイベントへの参加でポイントが付与され、地域での買い物や市の施設利用料などに使える。これを三鷹まるごと博物館ボランティア活動にも適用すれば、活動実績に応じたインセンティブを得ることができ、不公平感の解決につながると考える。

6　おわりに

本稿では、三鷹まるごと博物館を事例に、市民ボランティアの視点で、その10年のあゆみを見てきた。すでに多くの市民が支えている現状の中で、市民ボランティアの運営が試行錯誤の段階から、市民ボランティアの活動実態に合わせその制度が整備されていく過渡期を迎えている。三鷹まるごと博物館の取組みは、この10年で年々市民権を得てきている。今後の持続可能な市民ボランティア組織へと進化することを期待する。

また、三鷹まるごと博物館を構成する市民は、市民ボランティアだけではなく、市内で自主的に活動をしている地域に根差した市民生涯学習団体も含まれること、それらの団体が三鷹まるごと博物館の枠組みの中で活動していくこと、そのための仕組みづくりが必要である。この検討には、行政だけでなく現場で参加する市民も一体となった双方参加のワークショップなどを起点として、将来を見据えた効果的な議論を進めていきたい。

さらに、今回、三鷹市担当部署のヒアリングから、三鷹まるごと博物館の三鷹市における文化・歴史事業としての固有の課題も知り得ることができた。課題の解決には、市民の力強い後押しが必要であると感じた。

エコミュージアムを構築する主体は、市民と行政である。市民の日頃の生涯学習活動を通じてエコミュージアムに参画する自覚と、エコミュージアム事業への市民ボランティアのモチベーションの持続が、持続可能性の大きな要素と考える。そのために、市民と行政の風通しの良いコミュニケーションが重要と考える。その意味で、三鷹まるごと博物館の持続可能性に期待をするし、今後の三鷹まるごと博物館の取組みを注目していきたいと考える。

最後に、今回、聞き取り調査にご協力いただいた三鷹市スポーツと文化部生涯学習課のご担当者、また、筆者らがメンバーとして市民アンケートを実施した「三鷹市市民参加でまちづくり協議会」事務局、三鷹市企画部参

加と協働推進室の皆さまのご理解に感謝を申し上げます。

〔参考・引用文献〕

・大原一興 2003「日本におけるエコミュージアムのこれまでとこれから」財団法人かながわ学術研究交流財 2003 年報、pp75-82
・川村孝 2018『明日のまち三鷹を考える』ぶんしん出版
・笹谷康之、大森哲郎 1995「エコミュージアムづくりの方法論に関する研究」環境システム研究 vol.23 519-525
・下原裕司 2022「コラム：三鷹まるごと博物館 - エコミュージアムの取り組み」東北大学東北アジア研究センター HP
最終閲覧（2023.9.5）
・田中隆太 1999「エコミュージアム」農業土木学会誌 67.8
・田村明、横山貴史、大石貴之、栗林賢 2011「山形県朝日町におけるエコミュージアム活動による地域振興」地理空間 4.2
・福留強 2012「エコミュージアムの形成過程と開設手順」
聖徳大学生涯学習研究所紀要（10）,11-22
・『三鷹エコミュージアム研究誌「みぃむ」』三鷹市スポーツと文化部生涯学習課
創刊準備号～ vol.5 号
・三鷹市 HP　最終閲覧（2023.9.5）
・三鷹まるごと博物館 HP　最終閲覧（2023.9.5）
・三鷹市市民参加でまちづくり協議会 HP
最終閲覧（2023.9.5）
・三鷹市 2018「第 1 回三鷹型エコミュージアム交流会資料」